されてくるであろう。

一般の資本主義企業の經營論は事業管理がその主要な問題であるが、組合經營論は、この事業管理論のほかに、さらに組合員管理の問題が重要な地位をしめている。すなわち、組合員という大衆相手の事業經營であるところに大きな特色をもつている。なお、そのほかに組合の經營は零細で、しかも各種の事業が複合しているという特色がある。ここに、組合經營論としてさらに考察しなければならない多くの問題がひそんでいる。

三　組合實務論

海住　實著　農業協同組合の計理
笠原　千鶴著　農業協同組合簿記
鈴木　忠勝著　協同組合の能率的な事務の執り方
新井　義雄著　農業協同組合必携
蓬原　米藏著　農業協同組合監査入門
中島　光司著　農業協同組合の簿記
農業協同組合研究會編　農業協同組合實務講義錄全三卷

戰時中における農業會の會計のびんらんはその極に達し、これらの整理記帳は、終戰後の大きな課題となつていた。この要求に應ずるため、組合實務論の文献は、終戰後以上のように多數刊行せられてきた。しかも、これらの著者は、ながく組合經營の實務にたずさわつていた經驗者で、その經驗の累積が、この要求に應ずることになつたのである。そして、これら實務論者は、現在さらにその研究の分野を經營分析の問題にひろげつつあるから、組合經營論との關連性のもとにその成果があらわれることと思う。最後の農業協同組合實務講義錄は實務論を主體にしてはいるけれども、アプツーデートの組合問題を數篇のせている。そのうち辻誠氏の「農民組織十六原則論」は農協組織の今後の在りかたを論述し、大くの示唆をあたえている。

そのほか、歴史的研究として奥谷松治氏の「日本協同組合史」、辻誠氏の「海外に於ける協同組合の發達」、法律問題としては農林省農政課編「農業協同組合法の解説」をあげることができる。

（角　玄）

農家主食消費量調査結果概要

――農林省統計月報第一二〇號（昭和二四年一月）――

一

昭和二三年五月一日に實施した農林省統計調査局の農村現地報告の集計結果たる標記の調査は、わが國農家の主食消費量の傾向を把握するものとしてきわめて有用である。昭和二一年以來全國的な榮養調査が實施されているが、範圍は二十數ケ村であり、その位置も都市近傍に限られており、調査對象は必ずしも農家だけに限らないから、生産者がどれだけの食糧をとつているかは明かでない。本調査のサンプリングの方法は完全なそれではないが、

四九一市町村、一九、四六〇戸が全國的に分布しているから、全國的な鳥瞰を與えている點でも厚生省のそれと異なる。

内地平均をみると一人當り一日主食攝取量は米換算四・四合となつていて、常識的な期待と一致する。そのカロリーを年間攝取量から試みに算出してみると、家族當り一日二、〇〇〇カロリー、成人換算二、二三七カロリーとなり、全食糧中穀物及びイモ類の合計カロリーは七割程度とすると成人換算三、二〇〇カロリーを攝つていることとなり、厚生省の調査に比し一五パーセント乃至二〇パーセント上廻つている。われわれの常識では厚生省の調査は期待よりも少なすぎる數値であつて、本調査の方がむしろ常識的期待に一致する。

このカロリー計算に當つてわたくしは大豆はこれを除外した。いうまでもなく大豆中に含まれる炭水化物のほとんど全部は人間にとつて消化しないものであり、大豆は蛋白及び脂肪源であつて主食（わたくしは主なるカロリー源となる食品と解する）ではない。戰後の暫定措置として大豆及びその製品を主食の中で取扱わねばならなかつた食糧配給政策の缺陷を、そのまま本調査において米に換算する仕方は非科學的というそしりを免れるわけにはいくまい。

地域的にみるとかなりの例外があるが、經營規模が大きくなればなるほど主食の一人當り攝取量は增加している。數字の經濟價値の換算はないが、エンゲルの法則が轉倒している感を抱かせるものである。これはカロリーとしては四・四合でも充分であるけれども、蛋白質の攝取量が不足しているために起つた現象とわたくしは解する。大ざつぱにいつて、成人は體重一キロに對し勞働時も非勞働時も通じて一グラムの蛋白を要するといわれている。米だけで蛋白をとろうとすると米の蛋白だけでは質的に不充分であるから一日八合もとらないと足るまい。味噌その他の形で大豆を攝り、若干の動物質をとるけれども、一日米換算四・四合、その中から蛋白をほとんど有しないイモ類を差引くと三合餘りしか米を食べていないから、蛋白質の攝取量は農家の常食で常に不足勝ちである。經營面積が大きい農家ほど、蛋白質補充のためにより多くの主食を攝取するのはいわば當然である。經營規模の小さい農家がカロリーにおいても不足する以上に蛋白質に不足していることは、本調査がこれを暗示している。

二

本調査は全國を北海道・東北・關東・北陸・東山・中央・山陰・瀨戸内・北九州・南海の一〇地區にわかち、さらにその各々を平坦・水邊・山間の三つに區分し、合計三〇にわけて、それぞれにつき經營面積別に八つの「階層」にわけて、主食の量を算出している。その區分法の基礎をなすものは恐らく農家の生産物の種類に對應しているからであろう。たとえば東北・北陸の平坦部が米の單作地帶として、また北海道・南海・瀨戸内の一部が畑作の卓越している地帶としているが如きことが豫想されているであろう。本調査によつて東北・北陸の平坦部では年間攝取量の八〇パ

ーセント以上が米であり、南海の山間部では米の攝取量が五〇パーセントであることがわかる。しかし北海道の如き畑作の卓越しているところの水邊部や山間部が六〇パーセント以上米に依存していて、内地平均と大差がないというが如き常識的期待とやや異なるものがみられる。北海道農業は商品化傾向が進んでおり、一戸當り「經營規模」が内地よりも大きいことが、農家の米消費量を東北の一部を除いてもつとも多い結果たらしめたためと思われる。かくの如く經營の内容にまで立入ることは困難であろうが、地區別に農家當り生産物の種類と量がどのようなものかを併せて調査してほしかつた。

いずれの地區の階層の農家も現在の保有米の量よりも、平均して一合餘のヨリ多き保有を認めてほしいという結果もでている。このことは蛋白の要求量から推測できないこともないが、生産物の種類と量が判つていたら、その程度がいかなるものかをいくらかでも明らかにすることができたであろう。

規模の大きい農家がヨリ多くの主食を食べているのは、臨時傭の食込む量があるためかと思つたが、豐田氏(「農家の主食消費量について」農林時報、昭和二四年五月號)の本調査の解説によつて、臨時傭及び葬祭とりこみ等の食量が別のものであるかの如きことを見出した。この點も本調査の説明中にとり入れておいていただいた方が親切であつたと思う。

三

本調査がその規模及び意圖において劃期的なものであることはいうまでもない。しかもその數字は大ざつぱなカロリー計算からみても妥當であることが確かめられる。サンプリングの缺陷からみて零細經營のものが若干少なく、經營の大きいものは細かく地區をわけると一戸乃至數戸という階層もでてくるので階層別の區分については信憑度が低くならざるを得ないが、食糧經濟研究の手がかりとなる點では得がたい資料となるであろう。FAOのRice Bulletin No. 11 (1949)によると戰後米輸入國では戰前に比し國民一人當りの米消費量はヨリ少なくなり、輸出國はヨリ多くなつていて、この主原因は輸送機構の破壞と國際的に金融が困難になつたことにあるとしている。わが國の都市と農村の場合もこの一般的傾向の特殊のケースとみとめられるであろう。わたくしはヨリ多く米を攝取するようになつたとされる農村の食事の貧弱さをこの調査を通じてしみじみと感じた。(細野重雄)